日本人小児の高脂血症に関する疫学的並びに臨床的研究

班　　員　都立小児病院　熊谷通夫
研究協力者　弘前大学衛生　佐々木直亮
岩手医大小児科　若生宏
都立老人研究所　籏野脩一
東京女子医大小児科　草川三治
日本大学小児科　大國真彦
日本大学小児科　北川照男
慶応大学内科　五島雄一郎
大阪大学小児科　藪内百治
慶応大学病理　加野象次郎
慶応大学病理　細田泰弘
九州大学小児科　本田悳

動脈硬化症の一次予防は小児期にあることが明らかにされている。現在の予防的手段は危険因子の除去ないしは軽減が唯一の方法である。なかでも高脂血症は最大の危険因子の一つと考えられているが，小児期には臨床的に発見することは困難である。したがって小児期に高脂血症のスクリーニングを行い，早期発見，早期対応を行うことの重大性は明らかなことである。また集団スクリーニングを行うことによって，日本人小児の血液脂質値の実態と，それに影響を及ぼす諸因子が明らかにされることは具体的な対策を立てるうえで必須の要件と考えられるので本研究の意義は大きい。

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

動脈硬化症の一次予防は小児期にあることが明らかにされている。現在の予防的手段は危険因子の除去ないしは軽減が唯一の方法である。なかでも高脂血症は最大の危険因子の一つと考えられているが,小児期には臨床的に発見することは困難である。したがって小児期に高脂血症のスクリーニングを行い,早期発見,早期対応を行うことの重大性ほ明らかなことである。また集団スクリーニングを行うことによって,日本人小児の血液脂質値の実態と,それに影響を及ばす諸因子が明らかにされることは具体的な対策を立てるうえで必須の要件と考えられるので本研究の意義は大きい。